

訳 注

訓讀説文解字注（十五）

森 賀 一 恵

富山大学人文科学研究第 81 号抜刷

2024 年 8 月

訓讀說文解字注（十五）

森 賀 一 恵

「訓讀說文解字注（十四）」に續いて、段玉裁『說文解字注』を訓讀し注を附す。

凡例

『訓讀說文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に1) 2) 3) 等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇上は『繫傳』では缺けている卷二十五に當るが、今本の異同について記す。

十三篇上

(虫部)

48b

螟，螟蠃^(一)，蒲盧^(二)，細要土蠃也，天地之性細要純雄無子，詩曰，螟蛉有子，螟蠃負之^(三)，从虫兩聲^(四)，蜾，螟或从果^(五)，

螟，螟蠃は蒲盧，細要の土蠃也，天地の性，細要，純雄にして子無し，詩に曰く，螟蛉子有り，螟蠃之れを負ふと，虫に从ふ，兩の聲，蜾，螟或いは果に从ふ，

(一) 逗。疊韵。

(二) 句。疊韵。釋蟲、毛傳同じ。¹⁾

(三) 小雅・小宛に曰く「螟蛉子有り，蜾蠃之れを負ふ」，毛傳に曰く「螟蛉は桑蟲也，蜾蠃は蒲盧也，負は持也」，箋に云く「蒲盧 桑蟲之子を取り，負持して去る。煦嫗之れを養ひ，以て其の子を成す。萬民有りて治むる能はざれば則ち能く治むる者將に之れを得んとするに喩ふ」。中庸の注に曰く「蒲盧は果蠃，土蜂也」「蒲盧 桑蟲之子を取り，去りて而して變化し，以て成

1) 阮元本では、「螟」を『爾雅』釋蟲は「果」に作り，小雅・小宛傳は「蜾」に作る。なお，釋蟲は「蠃」も「蠃」に作る。阮元本『爾雅』校勘記に「果蠃蒲盧，唐石經、單疏本、正徳本同，石經考文提要引至善堂九經本亦作蠃，雪臆本、閩本、監本、毛本蠃改蠃，按說文，蠃，蜾蠃也，从虫兩聲，作蠃為俗字，五經文字，蠃，魯果反，見爾雅，為勝於開成石經，當本之釋文，今釋文亦改蠃矣，詩小宛作蜾蠃，說文於艸部作果蠃，於虫部作蜾蠃，爾雅當與說文同」。

し己の子と爲す」と。²⁾『列子』に曰く「純雌は其の名大羸, 純雄は其の名釋蜂」。³⁾『淮南』に曰く「貞蟲の動くは毒螫を以てす」, 高注して「貞蟲は細要の蜂, 蜾蠃の屬, 牝牡の合無きを貞と曰ふ」と。⁴⁾楊子曰く「螟蠃を取り祝ひて我に類よ我に類よと曰ふ」と。⁵⁾戴先生曰く「古語, 變に隨ひて成る者を謂ひて蒲盧と曰ふ」⁶⁾と。蒲盧又た『大戴禮』⁷⁾、『山海經』⁸⁾に見ゆ。小正に曰く「雉 淮に入りて蜃と爲る, 蜃なる者は蒲盧也」と。⁹⁾

(四) 古火の切, 十七部。

(五) 果の聲也。

49a

𧈧, 螟蠃也, 从虫羸聲^(一), 一曰虎蠃^(二),

羸, 螟蠃也, 虫に从ふ, 羸の聲, 一に曰く虎蠃と,

(校)「𧈧」, 大徐本、祁刻本「蜾」に作る。

(一) 郎果の切, 十七部。

(二) 此れ「羸」を單言すれば則ち「虎蠃」を謂ふを謂ふ也。「虎蠃」は下文「蠃」篆下に見ゆ。¹⁰⁾按ずるに下文「𧈧」篆下に「羸也」と。¹¹⁾此れ當に「一に曰く, 𧈧也」と云ふべし。而して「一に曰く, 𧈧¹²⁾ 蠃」と云ふ者は一物三名, 其の知り易き者を舉ぐる也。

𧈧, 螟蠃^(一), 桑蟲也^(二), 从虫雷聲^(三),

蠃, 螟蠃, 桑蟲也, 虫に从ふ, 雷の聲,

(一) 逗。疊韻。

2) 「夫政也者蒲盧也」注。阮元本は「果」を「蜾」に作り, 「土」上に「謂」字有り, 「化」下に「之」字有り。

阮元校勘記「蒲盧蜾蠃, 各本同, 釋文出蜾蠃云, 本亦作羸」。

3) 天瑞篇。

4) 說山訓。

5) 『法言』學行「螟蠃之子殪而逢, 蜾蠃祝之曰類我類我, 久則肖之」。

6) 四庫全書本『大戴禮記』夏小正・十月「雉入于淮為蜃, 蜃者蒲盧也」の案語に同じ。孔廣森『大戴禮記補注』に「蒲盧猶蒲羸也, 或曰, 蒲盧是變化之名, 故果羸亦為蒲盧」。なお, 戴震『中庸補注』に「夫政也者蒲盧也」鄭注を敷衍し「蒲盧, 二字疊韻, 形容之辭, 蓋古有是語, 夏小正, 雉入海為蜃, 說曰, 蜃也者蒲盧也, 與蜾蠃同名, 蒲盧取義可推而知, 政雖利民, 不得其人, 皆適以病民, 有隨人轉變之義, 然則蒲盧, 蜾蠃也, ……」という。

7) 夏小正。上注及び段注文参照。

8) 中次三經「青要之山……, 南望瑯渚, 禹父之所化, 是多僕隳蒲盧」。

9) 『大戴禮記』夏小正・十月。注6参照。

10) 十三篇上 57b。

11) 十三篇上 56b「𧈧, 𧈧蠃也」, 說解「𧈧」字段注に「此複舉篆文之未刪者也, 當依韻會刪」。

12) 「𧈧」は『說文解字』に無い。

（二）小雅毛傳の文。¹³⁾ 釋蟲同じ。¹⁴⁾ 按ずるに上文に「蜀は桑中の蠶」と云う¹⁵⁾ は其の中を蠶なふ者を謂ふ也。此の桑蟲「歩屈に似て、其の色青く細し、或いは艸葉の上に在り。土蜂之れを取りて木空の中、或いは書卷の間、筆筒の中に眞き、七日にして其の子を成す。里語に曰く、^{まじな}呪ひて我に象よ我に象よと云ふと」。『詩義疏』爾か云ふ。¹⁶⁾

（三）郎丁の切、十一部。

𧈧, 蛺蝶也^(一), 从虫夾聲^(二),

蛺, 蛺蝶也, 虫に从ふ, 夾の聲,

（一）疊韻もて名と爲す。今俗に胡蝶と云ふ。『莊子』に見ゆ。¹⁷⁾

（二）兼叶の切、八部。

𧈧, 蛺蝶也^(一), 从虫走聲^(二),

𧈧, 蛺蝶也, 虫に从ふ, 走の聲,

（一）徒叶の切、八部。俗に「蝶」に作る。

49b

𧈧, 蛺蝶也^(一), 从虫𧈧聲^(二),

𧈧, 蛺蝶也, 虫に从ふ, 𧈧の聲,

（校）大徐本、祁刻本「蟲」上に「蛺」字無く、「𧈧」を「之」に作る。

（一）「蛺」字、今補ふ。此れ三字句。蟲の蛺と名づくる有るを謂ふ也。段借して「氓の蛺蛺」と爲す。毛傳に曰く「蛺蛺は郭厚の兒」と。¹⁸⁾『玉篇』に曰く「癡也」, 此れ毛詩を謂ふ, 又曰く「笑

13) 小宛「螟蛉有子」傳。阮元本は「蠋」を「蛉」に作る。

14) 阮元本は「蠋」を「蛉」に作る。「也」字無し。

15) 十三篇上 45b に「蜀、葵中蠶也」, 段注に「葵爾雅釋文引作桑, 詩曰, 蜎蜎者蠶, 蒸在桑野, 似作桑爲長」。

16) 『爾雅翼』卷 26 釋蟲三・引く『詩義疏』は「似」上に「螟蛉」二字有り, 「細」下に「小」字有り, 「象我」を重ねない。『太平御覽』卷 945 引く『毛詩義疏』は「螟蛉」「小」が有る所は『爾雅翼』引く所と同じだが, 「眞」を「置」に, 「木空」を「本穴」に, 「里」を「俚」に, 「呪」を「祝」に作る。なお, 『爾雅翼』の引く「詩義疏」には陸機の名や劉芳の名を冠したものと選者名の無いものがあるほか「毛詩義疏」があり, また, 『隋書』經籍志にも北周の沈重のものほか, 数種の『毛詩義疏』が著録されており, この「詩義疏」がどの『詩義疏』を指すのか不明。『段注攷正』の挙げる『毛詩』『爾雅』疏引く陸機の義疏は段注引く所と比べると異同が多い。

17) 齊物論「昔者莊周夢為胡蝶, 栩栩然胡蝶也」。

18) 『毛詩』衛風・氓傳。阮元本は「兒」を「貌」に作る。

言』に曰く「未だ天に陞らざる龍は之れを蟠龍と謂ふ」と。³⁰⁾ 此れ讀みて盤^{ハン}の如くす。³¹⁾ 舟部般旋の字³²⁾ の段借也。

（二）附袁の切，十四部。

𧈧，𧈧威^(一)，委黍^(二)，委黍^(三)，鼠婦也^(四)，从虫伊省聲^(五)，

𧈧，𧈧威は委黍，委黍は鼠婦也，虫に从ふ，伊の省の聲，

（校）「𧈧」，大徐本、祁刻本「𧈧」に作る。

（一）「𧈧」，各本「𧈧」に作る。今正す。𧈧威は𧈧^イ韻字。逗。

（二）句。

（三）逗。

（四）爾風に「伊威 室に在り」，毛傳に曰く「伊威は委黍也」と。³³⁾ 釋蟲同じ。³⁴⁾ 按ずるに釋蟲「蟠は鼠婦」と「伊威は委黍」を以て畫して二條と爲し，一物と言はず。𧈧威は即ち今の地鼯蟲，鼠婦と異物なり。『本艸經』に「鼠婦」「一名𧈧威^{のみ}」と曰ふ³⁵⁾ は其の略ほ相ひ似たるを以て耳。『本艸經』「鼠婦」と「鼯蟲」を以て二條と爲し，下品、中品に分く。³⁶⁾ 實は則ち鼯は即ち鼠婦。蓋し一物にして略は異同有り。今細別し難き耳。許書の「𧈧^の」³⁷⁾ は蝨を謂ひ絶えて鼠婦に非ず。『太平御覽』乃ち『説文』を引きて曰く「蟠𧈧は鼠婦也」と。³⁸⁾ 他書に依りて一字を増す。據る可からず。

（五）於脂の切，十五部。

50a

𧈧，𧈧蟠^(一)，春黍也^(二)，呂股鳴者^(三)，从虫松聲^(四)，𧈧，𧈧或省^(五)，

𧈧，𧈧蟠は春黍也，股を呂て鳴く者，虫に从ふ，松の聲，𧈧，𧈧或いは省，

30) 『方言』12。

31) 附袁切は並母元韻，「盤」は並母寒韻。

32) 八篇下 6a 「般，辟也，象舟之旋，从舟从攴，攴，令舟旋者也」，段注に「釋言曰，般，還也，還者今之環字，旋也，荀爽注易曰，盤桓者動而退也，般之本義如是」。

33) 東山。

34) 阮元本は「伊」を「𧈧」に作る。校勘記に「唐石經同，五經文字，𧈧見爾雅，詩風作伊，雪牕本𧈧音伊，經作伊威，非，釋文𧈧音伊，本今作伊，當為𧈧，音伊，本今作𧈧，注疏本作𧈧威，蟠鼠負疏引此經同，乃并合詩爾雅字為之，非也，説文𧈧，𧈧威，委黍，从虫伊省聲」。

35) 『重修政和證類本草』卷 22 蟲部下品では「一名𧈧威」は白字（『神農本草』所収）で，「𧈧」を「𧈧」に作る。

36) 『重修政和證類本草』では，「鼯蟲」條は卷 21 蟲魚中品に，「鼠婦」條は卷 22 蟲部下品に見える。

37) 十三篇上 50a 「𧈧，蝨也」。但し，大徐本、祁刻本は「蝨」を「蟲」に作る。次頁參照。

38) 卷 949 蟲多部六・鼠負に「説文曰，蟠𧈧，鼠婦也，伊威，委黍，鼠負也」。

(校) 大徐本、祁刻本「春黍也」三字無し。

(一) 逗。雙聲。

(二) 『詩』釋文に曰く、「楊雄、許慎皆な春黍と云ふ」と。³⁹⁾ 陸氏據る所此の三字有り。今補ふ。周南の傳に曰く「斯螽は蝓蝓也」⁴⁰⁾、豳風の傳に曰く「螽斯は蝓蝓也」⁴¹⁾、釋蟲に曰く「蜚螽は蝓蝓」と。⁴²⁾ 舍人曰く「今所謂春黍也」と。⁴³⁾ 『方言』に曰く「春黍は之れを蝓蝓と謂ふ」と。⁴⁴⁾ 『詩』「斯螽」は即ち「螽斯」。『爾雅』「蜚」は即ち「斯」。⁴⁵⁾ 蝓蝓、春黍皆な雙聲⁴⁶⁾、蝓春⁴⁷⁾、蝓黍⁴⁸⁾ 又た疊韻。陸機疏に曰く「幽州人之れを春箕と謂ふ、蝗の類也」と。⁴⁹⁾

(三) 考工記・梓人の文。鄭曰く「股もて鳴くは蝓蝓、股を動かすの屬」と。七月に曰く「五月斯螽股を動かす」と。

(四) 息恭の切、九部。陸氏許慎「思弓の反」を引く。⁵⁰⁾

(五) 『毛詩』此くの如く作る。⁵¹⁾

𧈧，蝓蝓也，从虫胥聲^(一)，

蝓，蝓蝓也，虫に从ふ，胥の聲，

(一) 相居の切，五部。陸氏許慎「先呂の反」を引く。⁵²⁾

𧈧，螽也^(一)，从虫庶聲^(二)，

𧈧，螽也，虫に从ふ，庶の聲，

39) 周南・螽斯傳「螽斯，蝓蝓也」，「蝓」釋文。

40) 阮元本は「斯螽」を「螽斯」に「蝓」を「蚣」に作る。上注參照。疏に「此言螽斯，七月云斯螽，文雖顛倒，其實一也，故釋蟲云，蜚螽，蝓蝓，舍人曰今所謂春黍也，陸機疏云，幽州人謂之春箕，春箕即春黍，蝗類也」。

41) 七月「五月斯螽動股」傳「斯螽，蝓蝓也」。阮元本は「螽斯」を「斯螽」に「蝓」を「蚣」に作る。

42) 『爾雅』釋蟲「蜚螽，蝓蝓」注「蝓蝓也，俗呼蝓蝓」。

43) 周南・螽斯傳「螽斯，蝓蝓也」疏に「此言螽斯，七月云斯螽，文雖顛倒，其實一也，故釋蟲云，蜚螽，蝓蝓，舍人曰，今所謂春黍也，陸機疏云，幽州人謂之春箕，春箕即春黍，蝗類也」。

44) 『方言』11に「春黍謂之蜚蝓」。今本は「蝓」を「蜚」に作る。郭注に「蜚音葵，蝓音牆沮反，又名蝓蜚」。

45) 釋文に「蜚，本又作蜚，詩作斯，同，音私支反」。

46) 「蝓」「蝓」は心母，「春」「黍」は審母。

47) いずれも鍾韻。

48) 「蝓」は魚韻，「黍」は語韻。

49) 螽斯傳「螽斯，蝓蝓也」疏（注40參照）及び釋蟲「蜚螽，蝓蝓」疏（「陸機云，幽州人謂之春箕，春箕即春黍，蝗類也」）引く。

50) 『爾雅』釋蟲「蚣」釋文に「字亦作蝓，字林先凶反，郭先工反，說文思弓反」。

51) 注40,41參照。

52) 『毛詩』周南・螽斯傳「螽斯，蝓蝓也」，「蝓」釋文に「粟居反，許慎、呂忱並先呂反，郭璞才與反」。

（校）「蝻」，大徐本、祁刻本「蟲」に作る。

（一）「蝻」各本譌りて「蟲」に作る。今正す。『方言』に曰く「蟥，宋魏の間は之れを蝻と謂ひ，南楚の外は之れを蟥蟥と謂ひ，或いは之れを蟥と謂ふ」，郭注して「即ち蝗也，蟥，音詐に近し，蟥，音莫梗の反，亦た^{ツクバウ}蛭蟥と呼ぶ」と。⁵³⁾ 按ずるに即ち今北人謂ふ所の^{バクサク}蛭蚱。江南人之れを蝗蟲と謂ふ。^{シヤバウ}蟥蟥、^{シヤバウ}蛭蚱，一語の轉。許書上文「蛭蚱」と云ひ，下文「蝗」と曰ふ。蟥も亦た蝗也。故に列字の次此くの如し。『廣雅』⁵⁴⁾、『本艸』⁵⁵⁾云ふ所の「蟥」なる者の若きは皆な許の意に非ず。

（二）之夜の切，古音は五部に在り。⁵⁶⁾

50b

蝗，蝻也^(一)，从虫皇聲^(二)，

蝗，蝻也，虫に从ふ，皇の聲，

（一）^蝻部に曰く「蝻は蝗也」と。⁵⁷⁾ 是れ轉注爲り。『漢書』五行傳に曰く「介蟲の孽なる者は小蟲の甲有りて飛揚するの類を謂ふ。陽氣生ずる所也。春秋に於ては蝻と爲し，今は之れを蝗と謂ふ」と。⁵⁸⁾ 按ずるに蝻、蝗は古今語也。是を以て『春秋』「蝻」と書し⁵⁹⁾，月令「蝗蟲」を再言す。⁶⁰⁾ 月令は呂不韋作る所。

（二）乎光の切，十部。陸氏『説文』「榮庚の反」を引き，又た『爾雅』釋文「華孟の反」。⁶¹⁾ 皆な音の轉也。⁶²⁾

蜩，蟬也^(一)，从虫周聲^(二)，詩曰，五月鳴蜩^(三)，^蜩，蜩或从舟^(四)，

53) 『方言』11。今本は、郭注「梗」を「鯁」に、「蟥」を「蛭」に作る。『段注攷正』に「^{ツクバウ}蛭蟥，漢魏叢書本、戴本並作吒哂，盧本作^{ツクバウ}蛭蟥，段不知何據」。

54) 卷10釋蟲に「負蟥，^{ツクバウ}蟥也」。但し，「^{ツクバウ}蟥蟥，^{ツクバウ}蝻也」も見える。

55) 『重修政和證類本草』卷21蟲魚中品「廣蟲」條に白字（『神農本草』所収）で「一名地鼈」，黒字（『名醫別錄』所収）で「一名土鼈」と。

56) 庶聲は古十七部諧聲表では五部，之夜切（禡韻）は今韻古分十七部表では十七部。

57) 十三篇下1b。

58) 五行志中之上。

59) 蝗害については，桓公五年、僖公十五年、文公三年、八年、宣公六年、十三年、十五年、襄公七年、哀公十二年、十三年經に見える。『左傳』『穀梁傳』は「蝻」に作るが、『公羊傳』は文公三年「雨蝻于宋」を除き，すべて「^{ツクバウ}蟥」に作る。『左傳』文公三年、哀公十二年傳も「蝻」に作る。「^{ツクバウ}蟥」は「蝻」の或體。十三篇下1b^蝻部に「蝻，……，^{ツクバウ}蟥，蝻或从虫𧈧聲」段注に「公羊經如此作」。なお、『春秋』三傳に「蝗」は無い。

60) 孟夏「行春令，則蝗蟲為災」，仲冬「行春令，則蝗蟲為敗」。

61) 『爾雅』釋蟲「疾藜，^{ツクバウ}蜩蛆」注「似蝗而大」釋文に「蝗，華孟反，下同，字林音皇，説文榮庚反」。

62) 古十七部諧聲表で皇聲は十部，今韻古分十七部表で乎光切（唐韻）は十部だが，榮庚反（庚韻）、華孟反（映韻）は十一部。

蜩，蟬也，虫に从ふ，周の聲，詩に曰く，五月鳴蜩ありと，𧈧，蜩或いは舟に从ふ，
(一) 豳風の傳に曰く「蜩は蟬也」⁶³⁾，大雅「蜩の如く蟬の如し」，傳に曰く「蜩は蟬也，蟬は蜩也」⁶⁴⁾，小雅「鳴蜩嘒嘒たり」，傳に曰く「蜩は蟬也」と。⁶⁵⁾ 同じからざる者は或いは渾言し或いは析言す。蟬の類同じからざる也。夏小正の傳に曰く「唐蜩なる者は𧈧」⁶⁶⁾，『爾雅』に曰く「蜩、𧈧蜩は蟬蜩」。⁶⁷⁾ 許書「蟬」字無し。蟬は蓋し蟬の大なる者也。當に小正に依りて「唐」に作るべし。

(二) 徒聊の切，古音は三部に在り。⁶⁸⁾

(三) 七月の文。

(四) 古へ「周」「舟」通用す。⁶⁹⁾

𧈧，呂旁鳴者^(一)，从虫單聲^(二)，

蟬，旁を呂て鳴く者，虫に从ふ，單の聲，

(一) 考工記・梓人の文。鄭云く「旁もて鳴くは蜩蜩の屬」，正義に云く「蟬鳴くは脅に在り」と。

(二) 市連の切，十四部。

𧈧，寒蜩也^(一)，从虫兒聲^(二)，

蜩，寒蜩也，虫に从ふ，兒の聲。

(一) 『方言』に「小にして黒き者は之れを蜩と謂ふ」，又た曰く「𧈧は之れを寒蜩と謂ふ。寒蜩は瘠蜩也」と。⁷⁰⁾ 蜩と寒蜩を言ひて一と爲さず。許『爾雅』に本づきて説を爲す。釋蟲に曰く「蜩は寒蜩」。月令，七月「寒蟬鳴」，鄭曰く「寒蟬は寒蜩，蜩を謂ふ也」と。郭璞云く「寒蜩也」と。⁷¹⁾

(二) 五雞の切，十六部。或いは段りて虹霓の字⁷²⁾と爲す。

51a

𧈧，蜩鹿^(一)，蜩奈也^(二)，从虫奚聲^(三)，

63) 七月「五月鳴蜩」傳。

64) 蕩。

65) 小弁。

66) 『大戴禮記』「唐蜩鳴」傳。

67) 釋蟲。

68) 周聲は古十七部諧聲表では三部だが，徒聊切（蕭韻）は今韻古分十七部表では二部。

69) 舟聲も古十七部諧聲表では三部。

70) 『方言』11。今本は「小而黒」を「黒而赤」に作る。

71) 釋蟲「蜩，寒蜩」郭注に「寒蜩也，似蟬而小青赤，月令曰，寒蟬鳴」。

72) 十一篇下 14b 雨部「霓，屈虹青赤或白色，𩇛气也，从雨兒聲」，段注に「一从虫作蜩，猶虹从虫也」。

蟪，蟪鹿，蜎寮也，虫に从ふ，奚の聲，

（校）大徐本、祁刻本「寮」を「蟪」に作る。

（一）逗。

（二）「寮」舊と「蟪」に作る。許書此の字無し。淺人「虫」を増す耳。今「寮」に作る。音聊。釋蟲に曰く「蜎蟪は蟪蟪」。『方言』に曰く「蜎蜎，齊は之れを蟪蟪と謂ひ，楚は之れを蟪蛄と謂ひ，或いは之れを蟪蛄と謂ひ，秦は之れを蜎蜎と謂ひ，關自り而東は之れを蜎蟪と謂ひ，或いは之れを蜎蟪と謂ひ，或いは之れを蜎蟪と謂ふ。西楚は秦と名を通ずる也」と。⁷³⁾按ずるに「蜎蜎」は即ち許の「蜎蜎」。「蜎」は當に音伊なるべし。「蜎蟪」は音「貂料」の如し。即ち許の「蜎寮」也。「蜎蟪」は音「廷木」^{テイボク}の如し。⁷⁴⁾許「蟪」字無し。「蜎蟪」，夏小正「蜎蟪」に作る。⁷⁵⁾字宜しく支遄二音なるべし。今江東俗語尙ほ此くの如し。辭章家「遮了」二字に作るは是れ也。⁷⁶⁾小正七月「寒蟪鳴く」，傳に曰く「蜎蟪也」と。⁷⁷⁾上文五月「良蜎」⁷⁸⁾、「唐蜎」⁷⁹⁾と各物と爲す。『方言』亦た「蜎蜎」と「蟪」を以て各物と爲す。然らば則ち許「蜎」、「蟪蟪」は「蜎」、「蟪」と蓋し亦た別有り矣。

（三）胡雞の切，十六部。

蜎，蜎蜎^(一)，蜎寮也^(二)，从虫夬聲^(三)，

蜎，蜎蜎，蜎寮也，虫に从ふ，夬の聲，

（校）大徐本、祁刻本「寮」を「蟪」に作る。

（一）逗。『方言』「蜎蜎」に作る。「蜎」は音折，蜎は音于列の反。⁸⁰⁾蜎は多の聲，當に音折ならざるべし。『方言』に誤り有るを疑ふ。當に許に従ひ「蜎」に作るべし。音伊。

（二）按ずるに「蜎寮」は「蜎蟪」^{テイボク}、「蜎蟪」^{テイボク}、「蜎蟪」^{テイボク}と皆な雙聲疊韻に關はる。⁸¹⁾

（三）於悅の切，『廣韻』古穴の切⁸²⁾，十五部。

73) 『方言』11。

74) 「蜎」^蜎「蜎」は郭注に據る。

75) 『大戴禮記』夏小正「寒蟪鳴」傳「蟪也者蜎蟪也」。

76) 未詳。

77) 注 75 參照。

78) 『大戴禮記』夏小正「良蜎鳴」傳「良蜎也者五采具」。

79) 「蜎」字段注及び注 66 參照。

80) 『方言』11「蜎蜎」郭注。

81) 「蜎」は端母蕭韻，「寮」は來母小韻，「蜎」は定母齊韻，「蟪」は來母豪韻，「蜎」は定母青韻，「蟪」は明母屋韻，「蟪」は匣母齊韻，「蟪」は來母屋韻。「蜎」は「蜎」「蜎」と清濁の違いはあるがともに舌頭音で，「蟪」は「蜎」と同じ齊韻，「寮」は「蟪」「蟪」と同じ來母で，「蟪」は「蟪」と同じ屋韻。

82) 入十六屑・蜎（古穴切）小韻に「蜎，蜎蜎，蟪蛄，蟲名」。

51b

𧈧，𧈧𧈧^(一)，蟬屬^(二)，讀若周天子赧^(三)，从虫丐聲^(四)，

𧈧，𧈧𧈧は蟬の屬，讀みて周天子赧の若くす，虫に従ふ，丐の聲，

(校) 大徐本、祁刻本「𧈧」を「𧈧」に作る。

(一) 逗。各本皆な「𧈧𧈧」に作れば，則ち篆文と屬かず。今『廣韻』二仙引く所⁸³⁾に依りて正す。

(二) 按ずるに『爾雅』に「𧈧」なる者は「馬𧈧」と。⁸⁴⁾『方言』に蟬の「大なる者は之れを𧈧馬と謂ふ」と。⁸⁵⁾『玉篇』⁸⁶⁾『廣韻』⁸⁷⁾皆な曰く「𧈧」は即ち「𧈧」字。然らば則ち許の「𧈧𧈧」は即ち『爾雅』の「馬𧈧」也。前文「𧈧」篆及び解は顯らかに淺人の羈入に係る。⁸⁸⁾故に其の次字の旨を失す。

(三) 赧^{ゲン}王を謂ふ。

(四) 武延の切，十四部。

𧈧，蜻蛚也^(一)，从虫列聲^(二)，

𧈧，蜻蛚也，虫に従ふ，列の聲，

(一) 按ずるに楊雄⁸⁹⁾、李巡⁹⁰⁾、陸璣⁹¹⁾、郭璞⁹²⁾、『玉篇』⁹³⁾、『廣韻』⁹⁴⁾皆な「蟋蟀」，一名「蜻蛚」と云ふ。但だ許書のみ上文「𧈧」篆⁹⁵⁾と伍を爲さず。蓋し以て一物と爲さざる^か與。鄭考工記に注して曰く「注を以て鳴く者」は「精列の屬」と。⁹⁶⁾

(二) 良薛の切，十五部。

83) 下平二仙・緜（武延切）小韻「𧈧，馬𧈧，蟬中最大」下に「𧈧，上同，說文曰，𧈧𧈧，蟬屬」。

84) 釋蟲。注に「𧈧中最大者爲馬𧈧」。

85) 『方言』11「蟬」條に「其大者謂之𧈧，或謂之𧈧馬」。

86) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一「𧈧，彌緣切，爾雅曰，𧈧，馬𧈧，𧈧中最大者，，同上」。

87) 注 83 參照。

88) 十三篇上 47b 虫部「𧈧，馬𧈧也」段注に「此篆不與下文𧈧、蟬、𧈧、𧈧諸篆爲伍，不得其故，恐是淺人亂之耳」。

89) 『方言』11「蜻蛚，楚謂之蟋蟀」郭注「即趨織也，精列二音」。

90) 『毛詩』唐風・蟋蟀「蟋蟀在堂」傳「蟋蟀，蜚也」疏に「蟋蟀，蜚，釋蟲文，李巡曰，蜚，一名蟋蟀，蟋蟀，蜻蛚也，……，陸機疏云，蟋蟀似蝗而小，正黑，有光澤如漆，有角翅，一名蜚，一名蜻蛚，……」。

91) 上注參照。

92) 『爾雅』釋蟲「蟋蟀，蜚」郭注に「今促織也，亦名青蛚」。阮元校勘記に「亦名青蛚，單疏本、雪牕本同，釋文蜻蛚，子盈反，廣雅云，蜻蛚促織也，舊校云，本今作青蛚，按禮記月令正義引孫炎作蜻蛚，說文亦作蜻蛚，詩蟋蟀正義引李巡、陸機作蜻蛚，凡蜻蛚字皆不作青，此當從」。

93) 『大廣益會玉篇』虫部第四百一「𧈧，力結切，蜻蛚，蟋蟀」。

94) 下平十四清・精（子盈切）小韻に「蜻，蜻蛚，蟋蟀也」，また入十七薛・列（良薛切）小韻に「𧈧，蜻蛚，蟋蟀」。

95) 十三篇上 47a 虫部「𧈧，悉𧈧也」段注に「按蟋蟀皆俗字」。

96) 梓人「以注鳴者」鄭注に「注鳴，精列屬」。

蜻，蜻蛉也，从虫青聲（一），

蜻，蜻蛉也，虫に从ふ，青の聲，

（一）子盈の切，十一部。按ずるに「蜻」「蛉」二篆は當に「蜻」を先にし「蛉」を後にすべし。後人之れを倒にす。下は「蜻」を先にすれば「蛉」は則ち此の「蜻」に同じ。「𧈧𧈧」⁹⁷⁾は「𧈧威」の「𧈧」⁹⁸⁾に同じく，「螟蠶」⁹⁹⁾は穀を食するの「螟」¹⁰⁰⁾に同じきが如き也。

𧈧，蜻蛉也^(一)，从虫令聲^(二)，一曰桑根^(三)，

𧈧，蜻蛉也，虫に从ふ，令の聲，一に曰く，桑根と，

（校）「一曰」，大徐本、祁刻本「一名」に作る。

（一）『戰國策』に曰く「六足四翼，天地の間に飛翔す」と。¹⁰¹⁾『方言』に曰く「蜻蛉は之れを𧈧𧈧と謂ふ」，郭云ふ「江東は之れを狐黎と謂ひ，淮南人は蠛𧈧と呼ぶ。音康伊」と。¹⁰²⁾按ずるに『淮南書』に「水蠆 𧈧と爲る」と。¹⁰³⁾即ち蜻蛉也。今人「蜻𧈧」、「蜻𧈧」に作る。

（二）郎丁の切，十一部。

（三）「一に曰く」は猶ほ「一名」のごとき也。今本「一名」に作る。

𧈧，蔑蠛也^(一)，从虫蒙聲^(二)，

𧈧，蔑蠛也，虫に从ふ，蒙の聲，

（校）「蔑」，大徐本、祁刻本「𧈧」に作る。

（一）各本「蔑」を「𧈧」に作る。此の字無し。今正す。蔑の言は末也，𧈧也。『爾雅』「𧈧」に作るは古へに非ざる也。釋蟲に曰く「𧈧は𧈧𧈧」。¹⁰⁴⁾孫炎曰く「此の蟲 蚊より小なり」と。¹⁰⁵⁾郭『圖讚』に曰く「小蟲，𧈧に似たり。風春雨𧈧」と。其の飛ぶに上下すれば春の如く則ち天風き，回旋すれば𧈧の如く則ち天雨るを謂ふ。陸佃 郭語を引き互ひに之れを易ふるは非也。¹⁰⁶⁾

97) 十三篇上 51a 「𧈧，𧈧𧈧」。(p.69)

98) 十三篇上 49b 「𧈧，𧈧威，委黍，委黍，鼠婦也」。(p.65)

99) 十三篇上 49a 「蠶，螟蠶，桑蟲也」。(p.62)

100) 十三篇上 43b 「螟，蟲食穀心者」。

101) 楚策四。

102) 『方言』11。今本は注「謂之」を「名爲」に作る。

103) 說林訓。

104) 郭注「小蟲似𧈧，喜亂飛」

105) 『文選』卷7 甘泉賦「浮蠛𧈧而撒天」李善注「孫炎爾雅曰，蠛𧈧，蟲小於蚊」

106) 陸佃『埤雅』卷11 釋蟲・𧈧「爾雅曰，𧈧，蠛𧈧，孫炎注云，蠛𧈧，此蟲微細羣飛，郭璞亦曰，𧈧飛𧈧則天風，春則天雨，此言蠛𧈧將風則旋飛如𧈧，一上一下如春則雨矣，然其圖贊又曰，風春雨𧈧，二說不同也」。

『史記』「蜚鴻 壁に滿つ」,『索隱』高誘を引きて曰く「飛鴻は蟻蠓也」と。¹⁰⁷⁾ 按ずるに古へ「鴻」「蒙」は疊韻爲り。¹⁰⁸⁾ 故に高君「鴻」は「蠓」爲るを知る也。楊雄の賦「蟻蠓に浮びて天を掀ふ」, 蟻蠓は猶ほ鴻蒙のごとき也。細かきは蠓に至れば則ち其の外は皆な鴻蒙なり矣。故に其の字「蒙」に从ふ。

(二) 莫孔の切, 九部。

52a

蠓, 蠓^(一), 一曰浮游, 朝生莫死者^(二), 从虫蒙聲^(三),

蠓, 蠓^(一), 一に曰く, 浮游, 朝に生れ莫に死する者, 虫に从ふ, 蒙の聲,

(校) 大徐本、祁刻本「蠓」下「也」字有り。「浮」, 大徐本、祁刻本「蜚」に作る。「游」, 祁刻本「蠓」に作る。

(一)「蠓」字は蠓部に在り。¹⁰⁹⁾ 故に此ここに於て其の義を釋し, 而して蠓部に曰く「蠓也」と。皆な文勢の自ら然る也。

(二)「一に曰く」は猶ほ「一名」のごとき也。¹¹⁰⁾「浮游」, 各本「蜚蠓」に作る。俗人改むる所耳。「蠓」字, 許書無し。「蜚」字有りと雖も亦た非。今正す。¹¹¹⁾釋蟲に曰く「蜚蠓は渠略」。¹¹²⁾曹風毛傳曰「蜚蠓は渠略也, 朝に生れ夕に死す」と。¹¹³⁾ 其の狀は陸機詩疏、『爾雅』注に詳らかなり。¹¹⁴⁾「渠略」は段借字。

(三) 离灼の切, 五部。

蠓, 秦晉謂之蠓, 楚謂之蠓^(一), 从虫丙聲^(二),

蠓, 秦晉は之れを蠓と謂ひ, 楚は之れを蠓と謂ふ, 虫に从ふ, 丙の聲,

(校)「蠓」, 大徐本、祁刻本「蚊」に作る。

(一)「蠓」,「蚊」に作るは俗なり。今正す。「蠓」は蠓部に在り。¹¹⁵⁾ 故に此ここに類列せざる也。

107) 周本紀。『索隱』は高誘説引用に續いて「言飛蟲蔽田滿野, 故為災, 非是鴻鴈也」という。

108) 今音もいずれも東韻だが, 工聲も蒙聲も古十七部諧聲表では九部。

109) 十三篇下 3a「蠓, 蠓也」。

110) 姚文田・嚴可均『說文校議』に「蠓, 藝文類聚卷九十七、御覽卷九百四十五引作一名蜚蠓, 此作一曰, 誤」。

111) 鈕樹玉『說文解字校録』に「宋本蠓作游, 是也, 說文無蠓」, 姚文田・嚴可均『說文校議』に「說文無蠓字, 當作游」。

112) 郭注に「似蛄蜺, 身狹而長, 有角, 黃黑色, 叢生糞土中, 朝生暮死, 豬好啖之」。

113) 蜚蠓「蜚蠓之羽」傳。疏に「陸機疏云, 蜚蠓, 方土語也, 通謂之渠略, 似甲蟲, 有角, 大如指, 長三四寸, 甲下有翅, 能飛, 夏月陰雨時, 地中出, 今人燒炙噉之, 美如蟬也」。

114) 注 112, 113 参照。

115) 十三篇下 3a に「蠓, 蠓人飛蟲」。

此れ方俗殊語爲り，以て例を擧ぐる也。

（二）而銳の切，十五部。

𧈧，𧈧蛸^(一)，長股者^(二)，从虫肅聲^(三)，
𧈧，𧈧蛸^{セウセウ}は長股の者，虫に从ふ，肅の聲，

（一）逗。雙聲。

（二）釋蟲に曰く「𧈧蛸は長𧈧」。¹¹⁶⁾ 幽風の毛傳同じ。¹¹⁷⁾ 「跂」當に「𧈧」に作るべし。其の足長し，故に之れを長𧈧と謂ふ。許は則ち之れを顯らかにして「長股の者」と曰ふ也。此れ𧈧𧈧の一種¹¹⁸⁾，俗に喜母と謂ふ。¹¹⁹⁾

（三）古音「肅」は三部に在り。今音 穌彫の切。¹²⁰⁾ 俗寫「𧈧蛸」に作る。古音 消^{セウ}。今音 所交の切。¹²¹⁾ 此れ古今の轉變也。「蛸」篆已に上文に見ゆ。𧈧蛸の字爲り。¹²²⁾ 故に此ここに再出せず。

52b

𧈧，𧈧蟲也^(一)，从虫省聲^(二)，
𧈧，𧈧蟲也，虫に从ふ，省の聲。

（校）「蟲」上「𧈧」字，大徐本、祁刻本無し。

（一）蟲「𧈧」と名づくる有る也。

（二）息正の切，十一部。

𧈧，商何也^(一)，从虫𧈧聲^(二)，
𧈧，商何也，虫に从ふ，𧈧の聲，

116) 阮元本は「𧈧」を「𧈧」に作る。郭注に「小𧈧𧈧，長脚者，俗呼為喜子」。釋文に「郭云，音崎𧈧之𧈧，𧈧宜反，字林巨𧈧反，或居𧈧反，廣雅云，𧈧，脛也，字從足虫旁作者非」。

117) 東山「𧈧蛸在戸」傳に「𧈧蛸，長𧈧也」。阮元本「𧈧」を「𧈧」に「𧈧」を「𧈧」に作る。疏に「陸機疏云，……，𧈧蛸，長𧈧，一名長脚，荊州河內人謂之喜母，……」。

118) 七篇上禾部 39a に「𧈧，𧈧也」段注「小篆𧈧爲𧈧，之用切，種爲先𧈧後𧈧，直容切，而隸書互易之，詳張氏五經文字」。39b に「𧈧，先𧈧後𧈧也」。

119) 『毛詩』疏引く陸疏に見える。注 117 参照。

120) 肅聲は古十七部諧聲表では三部，穌彫切（蕭韻）は今韻古分十七部表では二部。

121) 「蛸」は『說文解字』大徐本の反切は相邀切（宵韻）だが，『廣韻』では「𧈧蛸，蟲也」と釋される「蛸」が宵（相邀切）小韻にみえるほか，「𧈧蛸，喜子」と釋される「蛸」が稍（所交切）小韻（下平五肴）に見える。いずれも今韻古分十七部表では二部。「消」は相邀切（宵韻）。「蛸」は肖聲，「𧈧」は小聲だが，肖聲、小聲ともに古十七部諧聲表では二部。

122) 十三篇上 47b 「蛸，𧈧蛸，堂𧈧子」。

(一) 釋蟲に曰く「**蜋**は**蠃**何」。郭云「未だ詳らかならず」と。¹²³⁾ 陸云「商, 失羊反, 字林 之亦の反」と。¹²⁴⁾ 按ずるに『字林』古へに近し。之亦の反は則ち字本と「**蠃**」に作る。而して許書當に「**啻**」¹²⁵⁾ 何」に作るべし矣。

(二) 力輟の切, 十五部。

蠃, 蠃**胆**也^(一), 周禮**蜡**氏掌除**蠃**^(二), 从虫昔聲^(三),

蜡, 蠃**胆**む也, 周禮 **蜡**氏**蠃**を除くを掌る, 虫に従ふ, 昔の聲,

(一) 肉部に曰く「**胆**は蠃 肉中に乳む也」。¹²⁶⁾「**蜡**」^{シヨ}「**胆**」^{シヨ} 音義皆な通ず。

(二)「**蜡**氏」は秋官の職也。鄭曰く「**蜡**は骨肉臭腐。蠃蟲**蜡**む所也」「**蜡**は讀みて狙司の狙の如くす」と。¹²⁷⁾ 按ずるに「狙司」は即ち覲伺也。「蠃蟲**蜡**む所」は即ち「蠃 肉中に乳む」の説。「乳」なる者は「子を生む」也。¹²⁸⁾ 蠃 子を生むを「**蛆**」と爲す。「**蛆**」なる者は俗字,「**胆**」なる者は正字,「**蜡**」なる者は古字。已に成るを「**蛆**」と爲し, 之れを乳生するを「**胆**」と曰ひ,「**蜡**」と曰ふ。『齊民要術』「**涪魚**を作る法」に「蠃をして**胆**ま令む勿れ」と。¹²⁹⁾ 其の意同じき也。釋蟲「**蠃**は醜**蠃**」¹³⁰⁾,「**蠃**」は「**千**據の反」¹³¹⁾,即ち「**蜡**」字の異なる者也。『廣韻』音誤りて字誤らず。¹³²⁾ 今『爾雅』各本誤る。郭云く「**蠃**」なる者は「母の背を剖きて生まる」¹³³⁾と。今大蠃是くの如き者有り。蠃蛹變じて蛾と爲る。亦た是れ**殼**を裂きて出づ。「**蜡**」字,『禮記』郊特牲借りて八蜡の字と爲

123) 阮元校勘記に「**蜋蠃**何, 毛本同, 雪牕本、元本、閩本、監本**蠃**訛**蠃**, 唐石經闕, 釋文**蠃**失羊反字林之亦反, 五經文字云, **蠃**失羊反, 又之亦反, 按失羊反, 字作**蠃**, 之亦反, 字作**蠃**, 說文 **蜋**商何也, 無**蠃**二字」。

124) 『爾雅』「**蠃**」釋文。

125) 古十七部諧聲表の十六部に「啻聲」が見え「隸作商, 與十部商別」と注釋がある。

126) 四篇下 40a. 段注「七余切, 五部」。

127) 『周禮』秋官・序官「**蜡**氏」注に「**蜡**, 骨肉, 蠃蟲所**蜡**也」。阮元本は「臭腐」を「腐臭」に作る。『周禮漢讀考』卷 5 秋官序官注に「說文虫部曰, **蜡**蠃**胆**也, 周禮**蜡**氏掌除**蠃**, 肉部曰, **胆**, 蠃乳肉中也, 通俗文同, 此注所**蜡**也, 當作所**胆**也, 謂蠃所聚乳也, 下云讀如狙者, 擬其音也, 狙司即覲伺, 史漢狙擊秦皇帝, 應劭云, 狙, 伏伺也, 方言, 掩**索**, 取也, 自關而西曰**索**, 或曰狙, 郭注云, 狙, 伺也, 三蒼, 狙, 伺也, 通俗文伏伺曰狙, 司伺古今字」。

128) 十二篇上 1b 乙部に「乳, 人及鳥生子曰乳, 獸曰產」。

129) 卷 8 脯腊第七十五。今本は「**胆**」を「**蛆**」に作る。

130) 阮元本は「**蠃**」を「**蠃**」,「**蠃**」を「**蠃**」に作る。「**蠃**醜**蠃**, 正德本同, 雪牕本、閩本、監本、毛本**蠃**作**蠃**, 唐石經作**蠃**, 釋文**蠃**呼暇反, 本今作**蠃**, 段玉裁云, 後人訛寫從金也, 釋文當是本作**蠃**○按廣韻九御引爾雅**蠃**醜**蠃**字不作**蠃**」。注 132 参照。

131) 『爾雅』釋蟲「**蠃**」釋文。通志堂本「**千**」を「**于**」に作る。北京図書館藏宋刻宋元遞修本同じ。法偉堂『經典釋文校記遺稿』に「**于**當作**千**」。

132) 去九御・**蠃**(章恕切) 小韻に「**蠃**, 蟲名, 爾雅云, **蠃**, 醜**蠃**, 剖母背而生, 或作**蠃**」。澤存堂本は「作」下字「**蠃**」を「者」と「虫」に従う字に作るが, 余廼永は「**蠃**」に改める。

133) 『爾雅』釋蟲「**蠃**, 醜**蠃**」注。

す。¹³⁴⁾ 八蜡を尋ねれば本と當に「昔」に作るべし。昔は老也、老物を息^{やす}む也¹³⁵⁾。故に『字林』「蜡」に作る。¹³⁶⁾ 李仁甫『說文』¹³⁷⁾「蜡、年終りの祭名」に作る。斯れ巨謬爲り。『本艸』「蜡」を以て水母の名と爲す。¹³⁸⁾

(三) 此れ當に『廣韻』「七慮の切」に依るべし。¹³⁹⁾ 五部。大徐「鉏駕の切」自り、遂に其の義を改め「年終りの祭名」と曰ふ者有り矣。蓋し『唐韻』祇だ蜡祭の音義有り、以て此れを釋く可からず。猶ほ「繫」、古詣の切、以て繫^纒を釋く可からざるがとき也。¹⁴⁰⁾

53a

𧈧、動也^(一)，从虫𧈧聲^(二)，

𧈧、動也，虫に从ふ，𧈧の聲，

(一)「動」なる者は「作也」。¹⁴¹⁾ 蟲の動くを「𧈧」と曰ふ。

(二) 而沆の切，十四部。

𧈧，徐行也，凡生之類行皆曰𧈧^(一)，从虫支聲^(二)，

𧈧，徐行也，凡そ生の類行くは皆な𧈧と曰ふ，虫に从ふ，支の聲，

(校)「徐」「凡生之類行皆曰𧈧」，大徐本、祁刻本無し。

(一) 李善の洞簫、琴二賦注¹⁴²⁾に依りて「徐」字及び「凡生」以下八字を補ふ。凡そ蟲行くを「𧈧」

134) 例えば「天子大蜡八，伊耆氏始為蜡，蜡也者索也，歲十二月，合聚萬物而索饗之也……」など。

135) 『周禮』春官・籥章に「國祭蜡，則飲豳頌，擊土鼓，以息老物」。

136) 『禮記』月令・季秋「臘先祖五祀」注「此周禮所謂蜡祭也」釋文に「謂蜡，仕迺反，字林作蜡」，また禮運「昔者仲尼與於蜡賓」注「蜡者索也，歲十二月合聚萬物而索饗之」釋文に「蜡，仕嫁反，索也，祭名，夏曰清祀，殷曰嘉平，周曰蜡，秦曰臘，字林作蜡」。

137) 『說文解字五音韻譜』卷5上聲一虫部「蜡，蟲名也，一曰，年終祭名」。

138) 『重修政和證類本草』卷22蟲部下品に「蜡，……，一名水母」。

139) 『廣韻』去九御・覲（七慮切）小韻に「𧈧，蠅𧈧，又七余切」「蜡，周禮有蜡」，去四十禡・乍（鋤駕切）小韻に「蜡，年終祭名，或作蜡，……」「蜡，上同」。

140) 十三篇上33b糸部「繫、繫^纒也，一曰惡絮」，段注に「大徐古詣切，非也，此字之本音見周易釋文，云，直作^𧈧下糸者，音口奚反，集韻，繫，牽兮切，引說文繫^纒今惡絮，陸德明、丁度非不言之憮然也，而六朝以後舍糸不用，而段繫爲糸，遂使繫之本義蕪蕪終古，至鼎臣奉敕校定此書，亦徑云古詣切，何淺率如是，尙自謂用唐韻，不知唐韻霽韻內之繫，非許書之繫^纒也」。「訓讀說文解字注（十三）」（『富山大学人文学部紀要』第79号，2023年8月）p.46参照。

141) 十三篇下52b力部「動」説解。

142) 『文選』卷17洞簫賦「是以蟋蟀蠅𧈧行喘息」注に「周書曰，𧈧行喘息，說文曰，𧈧，徐行，凡生類之行皆曰𧈧，𧈧音奇」，卷18琴賦「況𧈧行之衆類」注に「說文曰，𧈧行也，凡生之類行皆曰𧈧」。

と曰ふ。『周書』に曰く「蚊行喘息」¹⁴³⁾、小弁¹⁴⁴⁾に曰く「鹿の奔る、維れ足伎伎たり」と。「伎」、「本亦た跂に作る」。¹⁴⁵⁾毛傳曰く「舒なる兒¹⁴⁶⁾」、箋に云く「伎伎然として舒なる者¹⁴⁷⁾は其の羣を畱むる也」。按ずるに其の字當に「蚊蚊」に作るべし。毛傳、鄭箋正しく「徐行」説と合ふ也。『漢書』「跂跂脈脈として善く壁を縁る」¹⁴⁸⁾、其の字亦た當に「蚊蚊」に作るべし。「凡そ生の類」なる者、或いは行き或いは飛び、或いは毛或いは羸、或いは介或いは鱗、皆な是れ也。

(二) 巨支の切、十六部。

𧈧、蟲行也^(一)、从虫𧈧聲^(二)、

𧈧、蟲行也、虫に从ふ、𧈧の聲、

(一) 凡そ蟲行くを「𧈧」と曰ふ。上「蚊」は「徐行」爲れば、則ち「𧈧」は「疾行」爲る也。羽部に曰く「𧈧は小しく飛ぶ也」と¹⁴⁹⁾。

(二) 香沇の切、十四部。

𧈧、蟲申行也^(一)、从虫𧈧聲、讀若騁^(二)、

𧈧、蟲申び行く也、虫に从ふ、𧈧の聲、讀みて騁の若くす、

(校)「申」、大徐本、祁刻本「曳」に作る。

(一) 各本「曳行」に作る。「讀みて騁^{テイ}の若くす」を以て之れを定むれば、則ち「伸行」を是と爲す。今正す。許本と「伸」字無く、祇だ「申」に作る。¹⁵⁰⁾故に譌りて「曳」と爲す也。

(二)「𧈧」は「讀みて徹^{テツ}の如くす」¹⁵¹⁾。𧈧の聲にして騁と讀む者は雙聲を以て用と爲す也。『説文』に依れば十一部に在り。¹⁵²⁾今丑善の切¹⁵³⁾に讀む。

143) 『文選』洞簫賦李善注(注142)、玄應『一切經音義』卷8維摩詰經上卷「蚊行」條などに引く「周書」に同じ。但し、『逸周書』に「蚊行喘息」は見え、周祝解に「跂動喘息」。

144) 小雅。

145) 釋文に「伎伎、本亦作跂、其宜反、舒貌」。

146) 阮元本は「兒」を「貌」に作る。

147) 阮元本は「者」字無し。

148) 東方朔傳。顏注に「跂跂、行貌也」。

149) 四篇上20b。

150) 十四篇下32a申部「申、神也、七月含氣成體自申束」、段注に「古屈伸字作𧈧申、亦段信、其作伸者俗字、或以𧈧入許書人部耳」。八篇上26a人部「伸、屈伸」、段注に「疑此字不古、古但作𧈧信、或用申爲之、本無伸字、以屈伸訓伸篆、亦非說解之體、宋毛晃曰、古惟申字、後加立人以別之」。

151) 一篇下1a𧈧部「𧈧」說解。段注「丑列切、十五部」。

152) 𧈧聲は古十七部諸聲表では十一部、十篇上14a馬部「騁」の大徐反切「丑郢切」(廣韻同じ)(靜韻)は今韻古分十七部表で十一部。

153) 大徐の反切。丑善切(獮韻)は今韻古分十七部表では十四部。

𧈧，𧈧醜𧈧^(一)，𧈧腴也^(二)，从虫欲聲^(三)，

𧈧，𧈧は醜𧈧，腴を𧈧るる也，虫に从ふ，欲の聲，

(一)「𧈧」俗本「𧈧」に作る。今宋本、李燾本¹⁵⁴⁾、『集韻』¹⁵⁵⁾に依りて正す。¹⁵⁶⁾釋蟲に曰く「𧈧は醜𧈧」，音義に曰く「𧈧，施乾¹⁵⁷⁾ 𧈧に作る」と。¹⁵⁸⁾施據る所許と合ふ。

(二)「腴」なる者は「腹下の肥也」。¹⁵⁹⁾ 𧈧の類皆な其の腴を垂る矣。

(三) 余足の切，三部。『篇』¹⁶⁰⁾、『韻』¹⁶¹⁾ 皆な羊朱の切。

53b

𧈧，蠅醜𧈧^(一)，搖翼也^(二)，从虫扇聲^(三)，

𧈧，蠅は醜𧈧，翼を揺らす也，虫に从ふ，扇の聲，

(一) 釋蟲の文。字祇だ「扇」に作る。¹⁶²⁾

(二)「也」字，宋本に依りて補ふ。

(三) 式戰の切，十四部。

𧈧，它蟬所解皮也，从虫兌聲^(一)，

𧈧，它蟬解ぐ所の皮也，虫に从ふ，兌の聲，

(校)「它」，大徐本、祁刻本「蛇」に作る。「兌」，大徐本、祁刻本を「稅省」に作る。(孫刻本「稅」に作る。)大徐本「聲」字無し。

(一)「兌の聲」各本「稅の省の聲」に作る。淺人改むる耳。今正す。輸芮の切，十五部。

𧈧，螫也^(一)，从虫若省聲^(二)，

𧈧，螫也，虫に从ふ，若の省の聲，

154)『說文解字五音韻譜』。

155) 去三燭・欲(俞玉切)小韻に「𧈧，說文，𧈧，醜𧈧，垂腴也」。

156) 大徐本(孫刻本)、祁刻本は「𧈧」に作る。『汲古閣說文訂』は「𧈧」に作り「初印本如此，宋本、葉本、趙本、五音韻譜、集韻三燭皆同，今剗改云，𧈧醜𧈧，以合爾雅，考音義云，𧈧，施乾作𧈧，夫施作𧈧，必有所受之，又與說文合，說文僞爾雅多與今本異，未可是𧈧非𧈧矣」。

157)『經典釋文』注解傳述人・爾雅條末に「右爾雅，梁有沈旋集衆家之注，陳博士施乾、國子祭酒謝嶠、舍人顧野王並撰音，既是名家，今亦采之，附於先儒之末」。

158) 釋文に「𧈧醜𧈧，李、孫、郭並闕讀，而謝孚逢反，施作𧈧，音終」。

159) 四篇下25b「腴」說解。但し，段注本は「也」を「者」に作る。

160)『大廣益會玉篇』虫部第四百一「𧈧，弋朱切，𧈧，醜𧈧」。

161) 上平十虞・逾(羊朱切)小韻に「𧈧，爾雅云，𧈧，醜𧈧」。

162) 郭注に「好搖翅」。釋文に「扇，如字，說文作𧈧，云，搖翼也，音同」。

(一)「蠱」「螫」蓋し本と一字，若聲、赦聲は同部也。¹⁶³⁾ 或いは呼各の切に讀み，山東は此の音を行ふ。或いは式亦の切に讀み，關西は此の音を行ふ。釋玄應の書に見ゆ。¹⁶⁴⁾ 今人乃ち此の篆呼各を切し，下篆式亦を切するを以て，分けて之れを二とす。

(二)呼各の切，五部。

𧈧，蟲行毒也^(一)，从虫赦聲^(二)，

螫，蟲毒を行ふ也，虫に从ふ，赦の聲，

(一)周頌に曰く「自ら辛螫を求む」。¹⁶⁵⁾ 古へ亦た「𧈧」を段りて之れと爲す。『史記』「兩宮將軍を𧈧る如き有らば」，『漢書』「將軍を𧈧る」に作るは是れ也。¹⁶⁶⁾ 或いは云ふ「𧈧，音知列の切」と。¹⁶⁷⁾ 亦た「𧈧」に作る。¹⁶⁸⁾

(二)施隻の切，古音は五部に在り。¹⁶⁹⁾

𧈧，𧈧也^(一)，从虫亞聲^(二)，

𧈧，𧈧也，虫に从ふ，亞の聲，

(一)俗本「𧈧の屬」に作る。¹⁷⁰⁾ 今宋本及び『集韻』に依りて正す。長部に曰く「𧈧は𧈧也」と。¹⁷¹⁾

163) 古十七部諧聲表ではいずれも五部。

164) 玄應『一切經音義』卷2・大般涅槃經第二卷「蜂螫，舒赤反，說文，蟲行毒也，關西行此音，又呼各反，山東行此音，𧈧，知列反，東西通語也」，卷3摩訶般若波羅蜜經第十五卷「毒螫，式亦反，字林蟲行毒也，關西行此音，又音呼各反，山東行此音，𧈧，知列反，東西通語也」，卷10大莊嚴經論第十一卷「𧈧螫，知列反，下式亦反，字林，𧈧，螫也，說文，螫，蟲毒也，又呼各反，山東行此音也」，卷14四分律第二卷「𧈧螫，式亦反，字林蟲行毒也，關西行此音，又呼各反，山東行此音，𧈧，知列反，東西通語也」，卷18雜阿毘曇心論第五卷「所螫，書亦反，說文蟲行毒也，關西行此音，又呼各反，山東行此音，𧈧，知列反，東西通語也」，卷22瑜伽師地論第二十五卷「𧈧螫，知列反，下舒亦反，關西行此音，又呼各反，山東行此音，𧈧，東西通語也，說文皆蟲行毒」。

165) 小毖。

166) 寶嬰傳。索隱「螫音釋，謂怒也，毒蟲怒必螫人，又音火各反，漢書作𧈧，𧈧即螫也」。顏注「𧈧，怒貌也，音赫」。

167) 玄應『一切經音義』卷2，3，10，18，22。注164参照。但し新文豐出版影印同治八年曹氏重刊本は「𧈧」をすべて「𧈧」に作る。

168) 玄應『一切經音義』卷14は「𧈧」に作る。『類篇』十三中に「𧈧、𧈧，陟列切，螫也，或从折，𧈧又乃葛切，博雅痛也」。

169) 古十七部諧聲表で赦聲は五部，今韻古分十七部表で施隻切（昔韻）は十六部。『六書音均表』一・第五部第十六部入聲分用説に「第五部入聲與第十六部入聲，周秦漢人分用，晉宋而下多以第五部入聲之字韻入於第十六部，鄭氏合藥陌錫爲一部，未爲審矣」。

170) 『汲古閣說文訂』に「宋本、葉本、周氏宋本、集韻、類篇皆同，爾雅曰，𧈧，𧈧，故此云，𧈧，𧈧也，長部云，𧈧，𧈧也（今本𧈧舛），二字轉注，趙抄本及五音韻譜作𧈧屬而毛本從之，非是」。

171) 九篇下33a。但し，二徐本は「𧈧，蛇惡毒長也」（小徐本は「蛇」を「𧈧」に作る）。段注に「各本誤，今正，此用釋魚文也，虫部曰，𧈧，𧈧也，二篆爲轉注，今各本𧈧篆下作𧈧屬者，非是」。

此れと轉注爲り。長部下に詳かなり。

（二）烏各の切，五部。

𧈧，騷𧈧也^(一)，从虫𦍋聲^(二)，

𧈧，騷𧈧也，虫に从ふ，羊の聲，

（校）「騷」，大徐本、祁刻本「搔」に作る。

（一）「騷」各本「搔」に作る。今正す。「疥」字下に曰く「騷也」，今亦た「搔」に作る。¹⁷²⁾「搔は刮く也」。¹⁷³⁾其の意に非ず。唐人引く所「瘙」に作る。¹⁷⁴⁾「瘙」号韻に見ゆ。¹⁷⁵⁾乃ち俗字。許無き所。義に依れば當に「騷」に作るべし。「騷は擾也」。¹⁷⁶⁾毛云く「動也」と。¹⁷⁷⁾「騷痒」なる者は肌膚の間に擾動する也。玄應『禮記』を引きて「𧈧¹⁷⁸⁾くして敢へて搔かず」と。¹⁷⁹⁾俗に多く「痒」「養」字を用ふるは、蓋し非也。¹⁸⁰⁾「𧈧」の「虫」に从ふ者は往往にして蟲の膜に潛む有り。故に「疥」字亦た或いは「𧈧」に作り「疥」¹⁸¹⁾に作る。

（二）余兩の切，十部。

54a

𧈧，敗創也^(一)，从虫人食，食亦聲^(二)，

𧈧，敗創する也，虫人食に从ふ，食亦た聲，

（一）「敗」なる者は「毀也」¹⁸²⁾，「創」なる者は「傷也」¹⁸³⁾。毀壞の傷に蟲之れを食ふ有り。故に

172) 七篇下 30b 𧈧 (𧈧) 部「疥，搔也」。小徐祁刻本は「搔」を「瘙」に作る。

173) 十二篇上 36a 手部。二徐本は「刮」を「括」に作る。

174) 『禮記』内則「疾痛苛癢」注「苛，疥也」釋文に「苛疥，音界，說文云，瘙瘍也」，また『文選』卷 19 登徒子好色賦「旁行踣僕，又疥且痔」李善注「說文曰，疥，瘙也」。

175) 『廣韻』去三十七号・臬（蘇到切）小韻に「瘙，疥瘙」。

176) 十篇上 15b 馬部に「擾也，一曰摩馬也」。但し，段注本は「擾也一曰」四字が無い。段注に「各本摩馬上有擾也一曰四字，淺人所増也，今刪正，人曰搔，馬曰騷，其意一也，摩馬如今人之刷馬，引伸之義爲騷動」。

177) 大雅・常武「徐方騷騷」傳。

178) 内則。阮元本は「𧈧」を「癢」に作る。

179) 玄應『一切經音義』卷 5 太子須大拏經「下𧈧」條に「餘掌反，說文搔𧈧，禮記𧈧不敢搔，是也，字從虫，今皆作癢，近字也，又作痒，音似羊反，病名也，痒非字義」。

180) 七篇下 28b 𧈧 (𧈧) 部「痒，瘍也，小雅，瘰癧以痒，傳曰，瘰、痒，皆病也，釋詁亦曰，痒，病也，按今字以痒爲癢字，非也，癢之正字說文作𧈧」。また，五篇下 10a 食部「養，供養也」。

181) 『集韻』去十六怪・戒（居拜切）小韻に「疥癢疥，說文搔也，或从界，从虫」。

182) 三篇下 37b 支部「敗」說解。

183) 四篇下 51b 刃部に「办，傷也，……，創，办或从倉」。

字 虫に从ふ。『春秋』の經に曰く「麋鼠 郊牛の角を食ふ」¹⁸⁴⁾, 又た曰く「日之れを食する有り」と。
字或いは「蝕」に作る。¹⁸⁵⁾

(二) 乗力の切, 一部。按ずるに「飾の省の聲」と云ふ可し。

使用テキスト

『説文解字注』

嘉慶二十年經韻樓本影印 (上海古籍出版社, 1981 年)

必要に應じて, 下の版本を参照

嘉慶二十年經韻樓本影印 (藝文印書館, 1981 年)

皇清經解本

同治六年保息局補刊本

『十三經注疏』

阮元本影印 (藝文印書館, 1989 年)

『經典釋文』

通志堂本

必要に應じて北京図書館藏宋刻宋元遞修本を参照。

本稿は JSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

184) 成公七年。

185) 隱公三年經「日有食之」。『左傳』釋文に「食之, 如字, 本或, 音同」(張一弓校記に「「或」下有「作蝕」二字」)。『穀梁傳』釋文に「三年日有食之, 本亦作蝕, 音同, 後皆放此」。